まちづくり、目に見える形に
市街地、高原、そして竜東で

令和5年7月15日
伊藤祐三後援会
発行責任者
会長・鈴木明
題字揮ごう
高遠遠照寺
松井教一住職

後援会総会で挨拶する伊藤市長

力を増す日差しの中で、さわやかな風が心地よい季節となってまいりました。まぶしい青空の下で駒ヶ根市が明るく輝く日々が始まっております。新型コロナウィルスの感染症法上の扱いが、季節性インフルエンザと同等になり、三年余り続いたコロナ禍はようやく出口に立ちました。マスクを外して、すがすがしい空気をいっぱいに吸い込めるすばらしさを感じておられることと思います。今年の夏は、さまざまな祭りやイベントが各地で復活し、にぎわいが期待されます。

▽コロナ禍でのご協力に感謝

振り返りますと、市長就任から間もなくコロナ禍に突入しました。世界中が未知のウィルスに直面し、手探りの対応が始まりました。感染防止対策の決め手はワクチンとされ、市民のみなさんに前例のない規模で接種を行う取り組みに全力を挙げました。泰成スポーツフロアが集団接種会場となり、多くのボランティアのみなさんに支えていただきました。駐車場の整理や予約のお手伝いなど、まさに市民力を結集しての取り組みとなりました。あらためて感謝を申し上げます。

飲食店などのみなさんに営業時間の短縮をお願いしたり、公共施設の使用を制限したりと、感染防止のために、さまざまな制約が続きました。集会やイベントなどもなかなかできず、以前は当たり前であった、人と人が直接会ったり、話をしたりすることが、どれほど大事なことかと、多くの方があらためて感じたと思います。コロナ禍の出口に立ち、新たな時代の始まりをかみしめています。

▽中心市街地に新たな動き

ただ、ウィズコロナ時代の到来を見据えた取り組みは進めて参りました。まちづくりでも、みなさんに見える形で変化がいよいよ現れてきます。中心市街地や駒ヶ根高原、竜東の三つの地域について説明いたします。

始めに、中心市街地です。地域再生法人として、まちづくりのパートナーである青年海外協力協会（JOCA）が銀座通りにスポーツクラブ「ゴッチャ！ウェルネス駒ヶ根」をオープンしました。続いて、来年春には三歳児未満を対象にした小規模保育施設が設置されます。中心市街地に小さな子どもたちの明るい声が響く日々が始まります。スポーツクラブとあわせ、市街地に新たな人の流れが広がることが期待されます。

さらに、旧赤穂信金跡地周辺でも再開発がスタートします。民間企業が住宅と店舗を兼ねたビルを建築する計画で、市も国とともに支援を行うことにしています。散策できるような開放的な建物になる見通しで、こちらも新たなにぎわいにつながるものと期待されます。

中心市街地では市の開業補助金を利用し、飲食店などが増えています。アマゾンに代表される巨大な物販企業が世界中を席巻する中で、再開発のポイントは、単なる物販ではなく、そこへ行って初めて成立する「何か」を備えた施設を増やしていくことです。リモートではなかなか成立しない、スポーツクラブや保育施設は、その代表例といえます。飲食店も、サービスや人との語らいなど、その場で味わえる楽しみがあります。小規模であっても、こうした魅力を備えた施設を増やしていくことが重要だと考えています。長く大きな動きがなかった中心市街地で、目に見える変化が始まります。

▽観光も新たな時代へ対応

駒ヶ根高原も変わります。コロナ禍で観光は大きな打撃を受けました。市として、さまざまな支援を続けると同時に、コロナ後を見据えた準備も進めてまいりました。国定公園となった中央アルプスの魅力を高めるために、昨年七月、檜尾小屋をリニューアルオープンしました。資金を募るために、市として初めてクラウドファンディ

会員募集のお願い

伊藤祐三後援会では新入会員を募集しています。ご近所やお友達にお声かけをお願いいたします。会報を送らせて頂きますのでお名前、ご住所、電話番号をお知らせください。　事務局・大口国江

fax83-9553メールkunie.ooguti@cek.ne.jp

ングを行い、企業寄付とあわせて一千万円を超える資金が集まりました。全国の山岳愛好家のみなさんのエールをいただき、檜尾小屋は夏から秋のシーズン中は管理人が常駐し、周辺にテント場も設けました。

駒ヶ根高原では、今後の観光に不可欠となる通信、交通の二つのインフラ整備に取り組んでいます。通信では、駒ヶ根ファームス周辺には屋外ＷｉＦｉを設けました。利用者のみなさんへアンケートを行うツールとしても活用できます。来られた目的や交通手段、必要な施設など、生の声を集め、今後の施策に役立てていきます。交通では、七月から駒ヶ根高原と養命酒駒ヶ根工場や光前寺、マルスウイスキー駒ヶ岳醸造所などを結ぶ周遊バスの実証実験が始まります。駒ヶ岳ロープウエイを利用するため、マイカーを駐車場に入れた観光客や登山客に、ほかの観光スポットへ、どうやって足を伸ばしてもらうかが課題でした。そこで、高原とほかのスポットとの間の「ラスト・ワンマイル」をつなぐ足をつくろうと、過去二年にわたって電動バスなどの実験を行ってきました。この成果を基に、今年はいよいよ、夏から秋のトップシーズンに有償（大人一回二百円）で、一日四回運行することになります。周遊先の一つ、養命酒駒ヶ根工場では、来年秋、創業一〇〇年を記念して体験型施設などがオープンします。周遊バスを軌道に乗せ、こうしたスポットをつなぎ、駒ヶ根市全体の観光の底上げを目指します。

駒ヶ岳の千畳敷ホテルは、ウッドデッキを新設するなどリニューアルしました。駒ヶ根高原も、既に策定したグランドデザインの具体化を進めていきます。リニア中央新幹線が開通すれば、駒ヶ根市は三大都市圏から一時間前後で到着でき、長野県内で最も近い観光地となります。軽井沢町など新幹線沿線地域に代わり、駒ヶ根市を中心とする伊那谷が真っ先に選択される可能性が高まります。それまでに、さらに魅力を高めていかなくてはなりません。

▽まちのセンターラインが変貌

竜東では、新宮川岸地区の大規模ほ場整備とあわせて農産物などの加工拠点の整備が、今年秋から始まります。リニア中央新幹線工事で出る土砂を利用してＪＲ東海が中心となり埋め立て、整備していきます。この事業の大きな特色は、施設建設などハード面は市が中心となって進めていきますが、施設の運営は地元のみなさんが中心となって担っていただくことです。農産物の直売や加工など、さまざまなアイデアを地元のみなさんでつくる組織が既に検討を進めています。官民が力をあわせて新たな施設を軌道に乗せていきます。

今後、駒ヶ根高原、中心市街地、竜東と、市のいわばセンターラインに新たな拠点が順次、姿を現していきます。市民のみなさんには、駒ヶ根市が新たな時代に入ったことを実感していただけるものと考えています。

▽住みよさランクは県内トップ

東洋経済新報社が毎年、全国の八百十二市区を対象に調査している「住みよさランキング２０２３」で、駒ヶ根市は十一位となりました。昨年より大幅にランクを上げ、長野県内ではトップです。最近は、さまざまな指標がありますが、老舗の経済誌による調査ですので、みなさんと取り組んできたまちづくりに励ましをいただいたと受け止めています。

市民のみなさんからいただいた任期は来年一月までとなりました。世界中が揺れたコロナ禍への対応に取り組む一方、次の時代を見据えたまちづくりも進めてきました。残る半年余り、全力を挙げてまいります。

中ア開山式
シーズンの幕開け

玉ぐしを奉納する伊藤市長

駒ヶ根観光協会（会長・伊藤祐三市長）は四月二十八日、中央アルプスの開山式を中ア千畳敷（標高二六一一メートル）で開きました。

式典には伊藤市長をはじめ、関係者、一般登山客ら七十人が参加し、神事を行い山の安全を祈りました。

神事の後、伊藤市長は七月からスタートする駒ヶ根高原を周遊するバスや、千畳敷ホテルの改築などに触れ「さまざまな準備や努力が実を結び、コロナ流行以前のにぎわいがやってくるはずです。一層盛り上げていきたい」とあいさつしました。

市議会六月定例会一般質問より

次期市長選の進退は明言せず

駒ヶ根市議会は六月十五、十六日、一般質問を行い、十三議員が市政を質しました。

この中で、任期満了（令和六年一月二十八日）に伴う市長選挙への対応について「就任以来三年五カ月、アフターコロナを見据えて、第五次総合計画策定と財政再建を軸に市政運営を行って来ました。財政は着実に好転し、将来負担比率は半減し、基金は過去最高を更新しています。駒ヶ根高原と中心市街地、竜東振興の三つの柱で魅力あるまちづくりを進めています。住みよいまちランキング二〇二三では全国十一位になりました」と、三年間の業績を披瀝し「市民の皆様にいただいた来年一月まで任期いっぱい、まちづくりに全力を挙げていきます」と述べ、進退については明言を避けました。

伊藤祐三後援会令和五年度総会及び市政報告会

伊藤祐三後援会（鈴木明会長）は五月二十一日、駅前ビルアルパで令和五年度総会及び市政報告会を開きました。

新型コロナウイルスの感染防止対策をして行われ、会員三十人余が出席し、令和四年度事業報告、決算報告の承認。組織活動や機関紙発行事業を主とする後援会事業と、市長選挙に向けて体制づくりを二本柱とした令和五年度事業計画、組織活動費六十七万円、機関紙発行事業費二十五万円、事務所費三十二万円、選挙関連費用二百八十万円を盛り込んだ総額三百五十四万円を計上した予算案を原案通り可決しました。

鈴木会長は「コロナ禍に翻弄された三年間でしたが、その間、伊藤市長は選挙公約である財政健全化は大きな成果が出ています。アフターコロナを想定した第五次総合計画もスタートしました。計画を実現させるには伊藤市政が二期、三期と継続させなくてはなりません。そのために、後援会は組織を強化し、全力で支援しましょう」とあいさつし、会員の協力を求めました。

引き続き行われた市政報告会では、伊藤市長は「三年間を振り返って」をテーマに、プロジェクターを使い、グラフや写真を多用し、分かりやすく説明しました。

この中で、駒ヶ根市の大きな課題「財政再建への取り組み」、新時代への羅針盤として作成した「第五次総合計画」について説明しました。「財政再建への取り組み」は具体的に▽公共施設を十年で一割削減する数値目標の設定▽全事業を原則的に三年で見直しするーを掲げ、その結果、財政指標の将来負担比率は平成三十年度の約二百％が九一％と改善し、ワースト五位を脱出し、百五十位前後になりました。基金（市の貯金）は平成三十年度二〇億円が令和四年度は過去最高の約四十億円と大幅増となりました。

市政報告をする伊藤市長

また、「第五次総合計画」については五つの基本目標に「ひと、健康・支えあいの地域・ひとの流れ、しごと・もの、安心・快適」ーを掲げ、六つの重点プロジェクトに「少子化・子育て、共生社会、生涯活躍のまち、竜東振興、観光・環境対策」を挙げました。

このほか、地域資源を生かす取り組みとして、ウミガメプロジェクト、糸平プロジェクト、駒ヶ根フォーラムについても、写真で紹介しました。

前三越名古屋社長椎野聡氏講演「駒ヶ根をブランド化する」

伊藤祐三後援会は六月三日、赤穂公民館で「駒ヶ根の輝く未来を考える連続講座」を開きました。

前三越名古屋社長の椎野聡氏が本気で語る、売れる戦略！「駒ヶ根をブランド化する」をテーマに講演し、八十人余が熱心に耳を傾けました。

椎野氏は前段でリーマンショックから戦争、気候変動などこの十年間に激変したマーケットと購買行動に触れ、良い物を作れば必ず売れる時代でなくなった。販促の多様化に伴い、イメージ戦略では戦えなくなったと分析し、駒ヶ根のブランド化については「駒ヶ根には天与の絶景やきれいな水、空気をはじめ、既存の数多のリソース（資源）がある。駒ヶ根そのものをブランドにする」と述べ、そのためにはグローバルな価値観において、どうすれば駒ヶ根に行きたいと思うようになるか。顧客の心理になり切って、当事者全員で真剣に議論し、「なりたい駒ヶ根」の姿を共有し、それに向かって自分たちでブランドイメージを積み上げていくーと、駒ヶ根市ブランディングの考え方を示しました。

また、具体的なアプローチとして、新たにリソースを創るのではなく、既存リソースの強みを言語化、数値化する。モノやコトには必ず二面性があり、全てのリソースをポジティブサイトから見ることが大切。みんなで作り上げた駒ヶ根のイメージ、ブランドを認知してもらうには、顧客に体験してもらい、顧客自らが語っていただく、良質な口コミこそ最強の宣言となる。雄大な景色もきれいな水も天賦のもの。サービスやおもてなしで人が関わることで、顧客の心が動き、顧客の口から駒ヶ根ブランドが拡散させていくことができる。サービスやおもてなしの偏差を無くし、そのレベルを上げ続けることが重要。人口三万二千人という規模の駒ヶ根だから、可能。その結果、自律的に住民の力で競争優位が獲得され、人が集まり、資本が集まる状態を作り上げることでできるーと示唆に富んだ講演を締めくくりました。

会員の皆様へ寄付のお願い

伊藤祐三後援会は活動資金の全てを会員の皆様からの寄付金で賄っています。まことに恐縮ですが、ご協力いただける方は左記の口座へお振込みくださいますようお願い申し上げます。

記

アルプス中央信用金庫南支店
普通預金口座番号７１５４３８１
伊藤ゆうぞう後援会　代表伊藤祐三

会員の皆様のページ

祐三市長に一言

理事・須田　秀枝様

思いつくままに

「インデイーズ（独立系）候補」という言葉を新聞で見つけた。選挙に必要とされる地盤（後援会）や看板（知名度）カバン（資金）を持たない完全無所属候補。

「伊藤市長のミニ集会をやらないか」と声を掛けられたとき、伊藤市長の応援団は、これまで選挙に関わった事のない地元同学年の方々が手探りでやっているということを知った。その様子から「それじゃあ」と応援団に入ってみた。今から思えば、インデイーズ（独立系）に近いと感じたからだろう。しがらみが無いのは気持ち良い。

「ミニ集会」をしたのは、ファミリーサポート・ぐりとぐら」という二十数年続く子育て支援のボランティアグループ。このグループは大勢（たいせい）に組せず「寄らば大樹の陰」も好きではない。判断は個人。インディーズに繋がるかもしれない。

思いつくままに、まず苦言

○市長は紋切り型の言葉を繋げた空虚な挨拶をしない。話があまり面白くないのはなぜ？「対談」が「対談」になっていないのも課題。

○市長に話しかけると、こちらの話していることを聴いているのかどうかわからないときがある。

「先ずは耳を傾けて一旦は聞きおく」という姿勢がほしい。

○市長応援団の連続講座「駒ヶ根をブランド化する」の演題で、講師の椎野さんは、エルメスのブランド戦略のように、収益よりも、人や生き方を大切にする「ＬＯＶＥ」がこれらのＭＤ戦略の方向だと話した。会場から「市長にとってＬＯＶＥとは何か？」と質問が出た。私はそれが「市民」という即答であってほしかった。ここに暮らしている人が幸せであることが、講師のいうブランド戦略の出発点じゃないのかな？

思いつくままに、甘言

○就任初年度の市長は、何かの集まりがあってもお一人でいらっしゃることが多かったが、この頃は様子が違う。誰か彼かが次々と話しかけて、親しそうに談笑している。やはり市長は「市民と共にいる」と感じられる姿がいい。

○変ったといえば、この三年で市の赤字財政が大きく改善したことは、内外にもっと自慢すべきだ。

「天下の糸平」のように、これまでそこにあって当たり前と思っていた存在が発信されていたり、千畳敷のホテルがいつのまにか素敵に変わっていたりする。就任とほぼ同時に始まったコロナ禍の三年余りの間に手がけてきたことの、この先の成果を見てみたい。

○「流石は元記者」と思わせるフットワークの良さを感じたのは、応援団主催の連続講座の講師選定。その週末の東京、翌週末の名古屋の出張の合間に講師候補にご自身で会い、さっさと段取りをつけてこられた。選挙前に市内をくまなく歩いていたように、コロナで制限されていたフットワークの良さが再び活かされそうだ。そうして集まったものや、記者時代に全国で見聞きした街づくりのありようがこれまでの駒ヶ根と一体となって根付いて、駒ヶ根に住む者にとっても外から見ても「魅力」となるまでには時間も必要だ。私たち市民にも、辛抱の時間と「一緒にやろう」という気概が要る。みんなで魅力ある駒ケ根に集大成できたら楽しいだろうな、と思う。

○市長はＴＰＯからしてスーツスタイルが多い。季節に合わせてのコート着用などの着こなし、デザイン、色づかいもおしゃれだ。誰でも着たいものを着たいように着ればいい。着るものに限らず、様々な人が認められ大切にされるカラフルな駒ヶ根であってほしい。

駒ヶ根には、ＪＯＣＡをはじめとした新しい展開や世界との繋がりがある。一方、どんな逆境でも地域医療を守ってきた昭和伊南総合病院があり、ご高齢の方々への助け合いを苦と感じない多くの市民や、足元の課題を地道にボランティアで支え続ける方も多い。見えるもの見えにくいもの、それぞれが活き活きと動き続けられるよう、トップとしての適切な把握と判断を望む。記事にならない日常の中で、日々の生活を送っているのが大多数の私たち。そんな日常が幸せであり、駒ヶ根ブランドとして発信できたら素敵だ。

市長としての自信をつけてこられたように感じる今だからこそ、市長さんに贈りたい一言は「実るほど　こうべを垂れる　稲穂かな」

編集後記

ＮＨＫの朝のテレビ小説「らんまん」の影響なのか、駒ヶ根高原の山野草園にも訪れる人が多くなった。山野草は気難しいが面白い。梅雨空の下、カタクリの果実（種子）が熟し、落ちた種子を蟻がせっせと巣に運ぶ。種子の周りのエライオソームという付属体が蟻の大好物とか。ユキモチソウは性転換する。最初はみな雄、成熟すると雌になり赤い種をつける。大文字草は育種家が七重八重と豪華に咲かせても、実生苗は元の「大」の字に先祖返りする。先日、「駒ヶ根のブランド化」というテーマで椎野聡氏の話を聞いた。椎野氏は「水や空気がきれいで絶景、駒ヶ根そのものをブランド化すればいい。既存のリソース（資源）を磨き、口コミで拡散し駒ヶ根を訪れた人々が幸せを感じれば」と話した。市民が認識するかしないかは別として、駒ヶ根には数多のリソースがある。前述の山野草園も目立たないがリソースの一つ。雑草を抜きながら、これも駒ヶ根の資源を磨く作業かもと思う。来園者が少しでも「癒し」「幸せ」を感じてもらえればいい。（大口国江）